# 「鉄道マニア」として生きる
## ――趣味経験のライフヒストリー研究――

関西大学大学院　塩見 翔

1　目的

本報告の目的は趣味の担い手としての「マニア」に着目し、その経験を記述していくことである。「マニア」という呼称は、男性を主な担い手とする趣味、とりわけ近代社会において一定の伝統を有する趣味領域で多く用いられてきた。「マニア」は趣味の対象に造詣が深く、また強いこだわりをもち、その趣味領域において中心的な位置を占める存在としてもイメージされる。鉄道趣味はそうした「マニア」を多数輩出してきた代表的趣味領域の一つである。本報告では「鉄道マニア」を自認する個人の語りを通じて、「マニアであること」がいかに経験されてきたのかを探っている。

2　方法

「マニア」という存在をライフヒストリーの視点から捉えるため、幼少期から鉄道に興味をもち、「鉄道マニア」を自認する A さん（1970 年代前半生まれ、男性）を対象として半構造化インタビューを行った。分析の対象とするのは 2013～14 年にかけて 3 回にわたって実施したインタビュー・データである。また A さんが制作した同人誌における記述内容やブログ記事等も合わせて参照した。

3　結果

大学時代に日本国内の旅客鉄道全路線の乗車を達成し、同人誌作家やフリーライターとしても活躍してきた A さんは、一貫して自分自身を「鉄道マニア」と認識してきた。「マニア」という語は、「オタク」という語が一般に広まる前から熱心な鉄道趣味の担い手を指して使われており、A さんの場合もごく自然と「鉄道マニア」という語を使い始めたという。一方で、1980 年代の若者文化において「マニア」に対する風当たりは強く、鉄道趣味の世界でも「マニア」をネガティブな存在とみなして趣味者一般から区別しようとする言説があった。そうした風潮に対する反発心も A さんに「鉄道マニア」であることへのこだわりをうながした。A さんにとって趣味をすることとは、目の前にある対象を探求することを通して、人とは違う自分独自の世界観を磨き上げることであり、やがて A さんは彼独自の世界観を追求するなかで、鉄道史の研究とその成果発表の場としての同人誌の制作へと歩みを進めていくこととなる。

4　結論

1980 年代以降の「マニア」に対するネガティブなまなざしは、多くの鉄道趣味者に葛藤をもたらした。しかし、「鉄道マニア」という自己認識をもつ A さんはそうした風潮に与することなく、むしろ時代に対する批判的な視点を獲得することができた。1990 年代以降は鉄道趣味がオタク文化と徐々に一体化し、現在では「鉄道オタク」という呼称も一般化している。A さんにもアニメを趣味としていた時期があり、自身を「オタク第二世代」と関連づけて語るようにオタク文化との親和度は高い。けれども彼は鉄道を趣味とする自己、アニメを趣味とする自己、日常生活を送る自己を、それぞれ別ものと捉え、鉄道を「独自の世界観」を追求するためのもっとも有効なメディアとして選択していった。

A さんのライフヒストリー分析を通して、虚構の世界を重視する「オタク」とはまた異なった、「マニア」独特の世界観の構築の仕方を示すことができた。